Referee Time （審判だより７５号）

2025.3.3

みなさん、こんにちは。今年度・下半期も皆様による大会運営、ご支援により県内各カテゴリー大会、第15回KBC学園杯争奪第49回沖縄県春季ハンドボール選手権大会を残し円滑に終えることができそうです。ありがとうございます。

今回は、R7年に向けて、2月23日(日)久留米アリーナ会議室にて、本県から４ペア８名(島尻・比嘉ペア、知念・新垣ペア、坂本・棚原ペア、金城康太・金城久徳ペア)が令和７年度九州ブロックより全日本大会候補者として、選考会ならびに研修会に参加してきました。

午前は福島亮一日本ハンドボール協会審判本部長の講義、午後より筆記試験、鶴田九州ブロック審判長ならびに堀川委員による講義、その後シャトルランに取組み帰島しております。

九州各県より参加者は53名･26ペア、その中から、筆記試験、シャトルランの基準をクリアした審判員が、これまでの評価による実績も合わせて、令和７年度全国大会を務める審判員としてノミネートされていきます。

今回、参加者の中から、金城康太さんより参加報告が届いていますので、紹介致します。

併せて、令和６年12月18日(水)～22日(日)の間、島尻真理子さん・比嘉由紀乃さんペアより福井県で開催された、第76回日本選手権(女子の部)の参加報告が届いていますので、紹介致します。全国から日本協会指名レフェリーを含む８ペアのみ参加できる、国内最高峰の大会に２名が参加してきております。

同大会で事前研修として参加されたレフェリーに共有された事前研修資料(女子・男子)も掲載しています。

貴重な報告・資料となっています。審判員のみならず、選手、チーム関係者を含む多くの方々と情報共有ができたらと考えております。確認をお願い致します。

九州ブロック審判研修会に参加して

本部高等学校　　金城 康太

令和７年２月２３日に福岡県久留米市で行われた九州ブロック審判研修会に参加してきましたので、簡単ではありますがご報告いたします。

今回の研修では、３名の講師の方々（日本協会審判本部長：福島亮一氏、九州ブロック審判長：鶴田祐一郎氏、九州ブロック審判指導員：堀川智宏氏）にご講話いただきましたが、全体を通して「ハンドボールのイメージを守る」というキーワードが強く印象に残っています。ハンドボールのイメージを守るために、「危険行為に対する判定の基準」や「スポーツマンシップに反する行為」について改めて捉え直す必要があるということでした。特に、「スポーツマンシップに反する行為」に関して、オーバーリアクション、プロボケーション、シミュレーションといった行為は、国際大会に限らず国内のリーグＨや一般カテゴリーでも起きており、これらの行為を防ぐためにレフェリーのきちんとした対応が求められていると感じました。

＝メモ＝

◆オーバーリアクション、プロボケーション、シミュレーション

・早い段階で適切な対応（口頭注意、罰則）により、未然に防ぐ。

・オーバーリアクションは、違反を受けたことに対するリアクションである。

・状況によっては、攻撃側と防御側の双方に罰則の適用もあり得る。

また、ゴールエリア際の判定については得点に直接的に影響するため、再開方法は７ｍスローとフリースローのどちらか、違反したのは攻撃側と防御側のどちらかということを高い精度で判定していけるよう以下のことをより意識していきたいと思います。

＝メモ＝

◆ゴールエリア際の判定

・エリア内防御は、少なくとも片足がエリア内に明らかに踏み込んでいる状態。明らかに踏み込んでいない場合、それまでの「過程」が判断基準。（防御側がゴールエリアに入らないように振る舞っているか）

・先に位置を取ったのは誰か。（「先に位置を取る」は、必ずしもプレーヤーが止まっているとは限らない）

・クロージングドアに対する攻撃側の違反の判断基準は、２名の防御側プレーヤーの間が完全に閉じているかどうか。閉じていなければ、７ｍスローもあり得る。

今回の研修では、実際の試合の映像を見ながらの解説や経験豊富な審判員の方々の考えをお聞きする機会があり、とても有意義な研修会でした。これらの学びを糧に、今後もレフェリング技術の向上に励みたいと思います。

第76回日本選手権大会（女子の部）参加報告

島尻真理子・比嘉由紀乃
（文責：比嘉）

福井県あわら市において、12月18日（水）～22日（日）の日程で開催されました日本選手権大会（女子の部）及びトップレフェリー研修会に、島尻真理子・比嘉由紀乃ペアとして参加させていただきました。審判員の任務として「チーム・プレーヤーにトレーニングの成果を充分に発揮させる～コート内と交代地域の秩序を保つ～」ことが前提にあることは以前から提言されていますが、今回の研修を通して「危険行為に対する判定の基準」・「スポーツマンシップに反する行為」について改めて認識するとともに、ゲームマネジメントや判定基準についての具体的な視点と、実際のゲームで見られた事象をテーマに行ったレフェリー団によるオープンディスカッションの内容も踏まえ、報告をさせていただきます。

1．IHF、JHAが目指すもの

ハンドボールのイメージを守るべく、危険行為やスポーツマンシップに反する行為については毅然とした態度で厳格に対応することで、ハンドボールというスポーツの楽しさと、共感し合える喜びや感動を、ハンドボールの持つ魅力として発信していく。

ハンドボールを「する」人だけでなく、「育てる」人、「支える」人、スポーツを「観る」人全ての人の行動１つ１つがハンドボールのイメージを良くすることに繋がり、ハンドボールを守ることや未来のハンドボールの発展に繋がる。

2．審判員の目標について　（第76回 日本ハンドボール選手権大会（女子の部）審判関係資料参照）

3．ビデオディスカッション研修について

（1）オープンディスカッションにて取り上げたテーマ

① ステップ
② 得点後の罰則の基準（８の３、８の４）
③ オーバーリアクション、プロボケーション、シミュレーション
④ 一貫した基準、マネジメント
⑤ VR
⑥ ゴールエリア際の判定

（2）オープンディスカッションの方法

① テーマ設定

テーマの設定及びディスカッションの方法は、レフェリー団で話し合って決定した。具体的には、審判関係資料や当日の朝のミーティング内容の中から翌日のオープンディスカッションで取り上げるテーマを選定した。（大会前半は２会場に分かれていたため、２つのチームに分かれてディスカッションを行い、その内容については後日情報共有を行った。）

② 事前準備

ペアや個人で試合を観戦しつつ、選定したテーマに関連した映像クリップを複数作成。その後、宿舎にて、クリップ映像の確認と精選、翌日のミーティングに向けての打ち合わせを行った。

③ 当日の流れ

進行役によるテーマ内容等の概要を説明後、映像クリップで取り上げた試合の担当レフェリーから判定に関する見解を説明してもらい、「自分たちならどう判定するか」について各ペアで話し合った内容を積極的に発表していく形で意見交換を行った。映像だからこそ見えてきた、別の視点による見解や新たな疑問点など、活発な意見が出された。

（3）見解や考え方の視点、審判長･アセッサー等による助言内容について

① ステップ

・ステップに関するマネジメント。「3歩まで」は昔から変わっていないルール！

・吹き続けることが大事。

・取り逃してしまう原因は「キャッチの瞬間を見ていない」から。1対1の場面こそ、OF：DFに50：50で権利がある。攻撃有利にしてはダメ！

② 得点後の罰則の判定（8の3、8の4）

・根拠は「相手に対する危険性を軽視した違反行為（8の4の条文)」であるかどうか。高速なのか？接触の位置は？体のコントロールへの影響は？…など、8の3、8の4に照らし合わせ、根拠をもって判定することが大事！

・判定をする上で最初に行わないといけないのは、「状況判断」。影響の度合いではない。

・サンドイッチスタイル（相手を後ろから押して味方に当てる行為）は見逃してはいけない危険行為。「軽微な接触だからセーフ」ではない！

③ オーバーリアクション、プロボケーション、シミュレーション

・試合開始後の最初のプロボケーションに対しては、明確なBLで全体に示すべき。個人的な注意に留めてはいないか？

・笛を吹いて止める場合は、「明らかなもの」に対して。（疑わしきは罰せず）

（例）接触の前から倒れる、接触面と違う方向に倒れる…など

④ 一貫した基準、マネジメント

・競った試合や落ち着かないゲーム展開に対し、レフェリーが一緒になって動き過ぎてはダメ。大事な局面を見るためにも「止まって判定」することが判定の精度を上げることに繋がる。

・思い込みや先入観から入ると「観察」しなくなり、判定の精度が下がってしまう。

・延長戦になった時ほど、レフェリーが意識を向けないといけないことの1つはタイムマネジメント。（テクニカルオフィシャルは時間の管理と人数の管理）

⑤ VR

・接触における攻撃性の有無や競技時間の終了間際の事象など、コート上での事実観察に基づいた正しい判定を下すことに重大な疑念を持つ場合、あるいは様々な理由によりコート上の状況を観察できなかった場合、VR を使うことは有効。

（例）・肘や手が顔に当たった事象

攻撃側が肘を向けて相手に向かっていく場合の判定基準は「攻撃性があるかどうか」。攻撃性がある場合は、失格以上の判定もあり得る。

・試合終了間際の GK スローに対する防御側のブロック（違反の有無）

ただし、必要な場面が映像として撮れていなかったり、はっきり分からないこともある。その場合は、「防御側がそこに至るまでにどういう動きをしたのか、積極的かどうか」といった過程を観ることが大事。

⑥ ゴールエリア際の判定

・角度の有無に関わらず、「通常の攻防はどこでも起こる」ということを忘れてはいけない。「正当な方法で先に位置を取っているのはどちらであるか」という視点。

・７ｍスローの判定基準は、ゴールエリアの中に明らかに踏み込んでいるかどうか。グレーゾーン（ゴールエリアライン上）での事象は、防御側がゴールエリアラインを尊重しているかどうか、そこに至るまでの過程を見極めることが大事。（さらにそこにステップが絡んでくる）

・ウィングのシューターに対するロングフットの見極め。オープンスペースに走り込もうとするシューターに対し、不自然に足を出して位置を取ろうとすること自体が危険で間違った行為。

・絶対の判定（7m スローなのか？フリースローなのか？オフェンシブファウルなのか？）が必要な時ほどレフェリーに注目が集まるからこそ、はっきりと示すことが重要。

・防御側と攻撃側が接触したことでゴールエリア内に両者が倒れ込んだ場面、ウィングシューターがそれを把握した上で避けてシュートをしていれば、外したとしても７ｍスローを判定する必要はなし。しかし、ゴールエリア内に両者が倒れ込んでいる状況で、なおかつ、その場所がシューターとなるウィングプレーヤーの進行方向となる場合は、即座に競技を中断しフリースローとする。（危険回避の視点）

４．今大会及び研修会を振り返って

今大会及び研修において、最も印象深かったのは「ディスカッションを通して出てきた見方・考え方を受けて、自分自身が『ハンドボールのルール』と照らし合わせてどう判定するかが大事」という言葉です。同じ映像クリップでも、個人間や他のペア間において、着眼点や判定の見解に違いが出てくる場合があることを身を持って体験できたことで、これまで気づかなかった新たな視点や、逆に、大切にしたいと思う自分自身のハンドボール観を見つめ直すことができました。その上で、日本のハンドボールに携わるレフェリーの一員として、一貫性のある判定を追求していくことの重要性と、ハンドボールの魅力を発信できるように努めるための責任を強く感じました。しっかりとした理論と根拠を持ち、毅然とした態度で判定できるよう、これからもより一層研鑽に励みたいと思います。

令和６年度 第76回

日本ハンドボール選手権大会（女子の部）審判関係資料

この度は、国内最高峰の大会であります標記大会へのチームとしての参加、およびレフェリーとしてのノミネートおめでとうございます。

リーグ H 加盟チーム、ジャパンオープントーナメント、全日本学生選手権の上位チームをはじめ、各ブロックでの厳しい予選を勝ち抜いたトッププレーヤー、トップコーチおよび日本協会審判本部より推薦されたトップレフェリー８ペアが福井に集結いたします。国内最高峰の大会というに相応しい舞台が整いました。大会のために準備いただいた開催地、福井県ハンドボール協会をはじめ、大会にかかわる全ての方々および全国のハンドボールファンの皆さんに、沢山の魅力あるプレーによって、ハンドボールの素晴らしさを発信できればと思います。

本年、世界中のトップアスリート、観客がパリの地に集い、第33回オリンピック競技大会（パリ 2024）が開催されました。日本男子チームがアジア予選を勝ち抜き、世界に挑戦する姿が記憶に新しいことかと思います。

パリ 2024 が開催されるにあたり、IHF はハンドボールの将来を見据え、オリンピック競技としてのプライドを保ち発展していくことを目的に競技規則の改訂を行い、大会直前には大会審判員・テクニカルオフィシャルのみならず、参加する各国に向け指導内容を展開・共有しました。

その通知文には前語りとして、以下の３つの内容を記載していました。

★ この大会（オリンピック）で大きな変更や、特別な要望をすることはありません。競技規則の解釈は、これまでの世界選手権とほぼ同じです。

★ **私たちのスポーツ（ハンドボール）のイメージを守ることは非常に重要です。**今回、身体的な違反行為に関しては、安全を保障するため、より明確に対応したいと考えています。また、今大会にノミネートされている審判員には、シミュレーションなどの行為に対しても、厳格に対応するよう指示しています。

★ 女子と男子の競技に異なるガイドラインを設ける理由はありません。

「危険行為に対する判定の基準」・「スポーツマンシップに反する行為」について改めて捉え直すことで、私たちのスポーツ（ハンドボール）のイメージを守ろうとしている意思が伺えます。IHF が危機感を感じ、スポーツとしての生き残りをかけたこの行動は、「世界で起きていること」ではありません。国内でも同様の危機感があることは、我々、ハンドボールに携わる者が共有しなければならないことの一つです。

未来を担う子どもにとってハンドボールは、やりたいと思うスポーツでしょうか。

保護者にとってハンドボールは、自分の子どもにさせたいと思うスポーツでしょうか。

学校や地域にとってハンドボールは、部活動、クラブとして開設、維持していきたいスポーツでしょうか。

企業にとってハンドボールは、企業スポーツとして出資、運営したいスポーツでしょうか。

今の日本のハンドボール、１０年後、２０年後はどうなっているでしょうか。

世界中を熱狂させたパリ 2024 は、選手やチーム役員の日頃からの努力の賜物であることは言うまでもありません。ですが、IHF の競技規則の改訂、事前の指導内容の共有があったからこそ、パリ 2024 はプレーの質が向上し、世界中の人々を魅了するプレーが数多く見られた大会であったことは、周知の事実です。

そして本年度、日本においても人格形成を目指した「体育」という伝統から、「スポーツ」そのものを様々な方面から楽しむこと、スポーツの価値を世界の人々と分かち合い、スポーツを通じた社会変革に向け世界と協調していくことを目指し、先般 10 月に開催されました佐賀大会より、『国民体育大会』から『国民スポーツ大会』へと生まれ変わりました。

変革については、IHF 同様、我々にも問われています。

本大会は、先ほどから繰り返し述べておりますが、「国内最高峰」の大会です。周囲の期待も高いものがあります。それぞれの立場で、大会に参加する者として、「チーム（プレーヤー、チーム役員）として」、「審判員として」、「競技役員として」、皆さんはどのような意識を持ち、パフォーマンスを示そうとお考えでしょうか。**スポーツは「する」人だけでは成り立ちません。する人を「育てる」人、「支える」人、スポーツを「観る」人･･･スポーツはその全ての人から成り立っています。**今のスポーツは、これら全てのスポーツ文化から成り立っているといっても過言ではありません。

スポーツだからできること、ハンドボールだからできることを一人ひとりが考え、スポーツの楽しさを感じ、共感し合える喜びや感動を、ハンドボールの持つ魅力として、我々から発信していければと思います。皆さまお一人お一人の行動が、ハンドボールのイメージを良くすることに繋がり、ひいてはハンドボールを守ることへと繋がっていきます。

それぞれの立場から大会の成功、未来のハンドボールの発展に向けての準備をよろしくお願い申し上げます。

第 76 回日本選手権大会に参加するにあたり、以下の内容を確認いただき、その準備の参考にしていただけますと幸いです。

Ⅰ　大会の組み合わせ・日程等

日本協会 HP に組み合わせ及び日程等が掲載されています。以下の URL より確認ください。

https://handball.or.jp/game/nihon_senshuken_w_2024.html

Ⅱ　事前研修の共有

大会審判員およびテクニカルオフィシャル向けの事前研修内容を Google フォルダーに格納しています。以下 URL より繋げていただき、内容のご確認をお願いします。

＊＊ チームの皆様も閲覧可能です。審判員への事前指導内容としてご理解ください。＊＊

＜Google フォルダーURL＞

https://drive.google.com/drive/folders/19tYJacYKC70cw-24Ey_VSGdC880Pa3Tw?usp=sharing

Ⅲ　本大会審判員の目標

国内最高峰の試合を担当すべく、国内全ての審判員の「模範」となるべく、国際基準に則したレフェリング、競技規則の運用は必須なものとなります。

審判員の任務として、前提にあることとして、以下のことがあげられます。

「チーム・プレーヤーにトレーニングの成果を充分に発揮させる
～コート内と交代地域の秩序を保つ～」

Ⅰ　ゲームマネジメントの視点で

（1）　「審判員の心得 10 箇条」より「①リーダーシップ」　「②誠実さ」

・ 国内の全てのレフェリーの**「模範」となる立ち居振る舞い**。

・ **プレーヤー、チーム役員との良好なコミュニケーションを基本に、情報発信、予防的行動**。

・ **「穏やかに振る舞うことを基本」**に、ボディーランゲージは、大きく、明確に示す。違反の種類を表す**ボディーランゲージは、その違反の内容を「具体的に示す」**こと。特に**イエローカードを示した場合**は、「これ以上、繰り返さないこと」を明確に示すために、「**大きく、そして強いボディーランゲージ**」で示すこと。2 分間退場以上の判定を下した場合は、**まず、違反したプレーヤーに対して**「具体的に違反の内容を示し」たあと、交代地域の戻る違反したプレーヤーを観察しながら、ジャッジーズテーブルに向かって、**会場全体に示すように「もう一度全体へ示す」**ように（※ 違反を受けたプレーヤーに治療行為が必要であれば、最優先に！）。

・ **試合開始 15 分間**の基準作り、そして、その**基準を試合終了まで維持**。

・ **試合終盤**（僅差の場合や、残り 10 分を切ってからは全ての試合において）**の集中力の維持**。この時間帯に**ミスが決してあってはならない**覚悟で。通信機器を利用し、お互いで集中力を高めるための工夫が必要。

・ 7mスローの際のレフェリーの位置は、**「スロアーの足」および「シュートの軌道」が確認でき、「スロアーの視野に入る」位置を取る。スロアーの真後ろには、立たない**。

・ **スポーツマンシップに反する行為に対するレフェリーの毅然とした態度**も、「誠実」さにつながる。

（2）　バランス

・ 「判定のバランス（特に近い時間帯における）」

・ 「両レフェリーのバランス」**（ペア間だけでなく、大会参加レフェリーが全て同じ基準で）**

・ 「両チームへの運用のバランス」

（3） 両レフェリーによる「任務分担」を超えた協働作業

・ **ピボットゾーンの攻防**の管理　**情報発信はコートレフェリーから行う。**

・ **シュートコース**と GK の頭部の確認。

・ **スローオフを正しく行わせる。**スローオフエリアにおけるプレーの観察と、スローオフエリア外の観察を。得点後、コートレフェリーからゴールレフェリーへと戻るレフェリーがスローオフエリア外の両サイドの攻撃側プレーヤーの位置を観察し、必要に応じて修正させることも必要。

・ **通信機器を用いて、「両レフェリー」で管理しているという雰囲気を与える。**

2　判定基準の視点で　※ 別紙 「事前研修 ： Refereeing Guidelines ： 解説」を参照

※ 映像は、研修目的に作成しており、レフェリー・プレーヤー・チームとは関係ありません。
また、映像に関する見解は、IHF 審判委員会からの見解を記載しています。

（1） ピボットゾーンの判定基準

○ 両レフェリーによる「協働作業」で管理する。情報発信は「コートレフェリーより」行う。

○ 競技規則は、「攻撃側」「防御側」双方に対して、「同様に」適用される。状況によっては、**攻撃側の違反に対し、罰則の適用もあり得る。**

○ **過敏にならない。**ボールのないところの違反について判定を下す場合は、周囲に明確に伝わるボディーランゲージで、違反の種類を示すこと。

○ ダブルピボット等、多様な攻撃形態に対応できるよう、通信機器を用いて連携を図る。

（2） オーバーリアクション　プロボケーション　シミュレーション

○ **レフェリーが早い段階から、適切な対応、判定をすれば、防ぐことができる。**

○ 後半、試合終盤・僅差の状況で初めて起こりうることもある。

○ **オーバーリアクションは、そもそも受けた「違反」に対するリアクション**ということを忘れない。

○ 違反の質や種類によっては**攻撃側、防御側双方に罰則を適用できる。**

○ シミュレーションの疑いがある場合は、VR を使用しても構わない（大会における VR 使用の有無については、現在検討中）。

（3） ゴールエリア際の判定　攻撃側の違反か７ｍスローか

○ **ゴールエリア際の判定の精度が高いことが、ゲームマネジメントの質も高いと言える。**

○ ゴールレフェリー時も、高い集中力を持って、エリア際を注視しておく。視線は常に「ゴールエリア際」「ボールのないところのプレーヤー」へ向けておく。「間接的に」ボールの位置を確認しておく。

○ クロージングドアに対する攻撃側の違反は、**２名の防御側プレーヤーによる「すきま」が「完全」に閉ざされた状況**である。閉じていない状況であれば、７ｍスローの判定もあり得る。

○ ゴールエリアへの侵入は、少なくとも片方の足がゴールエリア内に**「明らかに踏み込んでいる」時**である。グレーゾーン（ゴールエリアラインに触れている場合）として、どちらの違反にするかの判断基準は、**防御側プレーヤーがそれまでの防御行為の過程の中で「ゴールエリアに侵入しないように振る舞っているかどうか**（ゴールエリアを尊重して振る舞っているか）」となる。**最終的な状況でのみ判断することなく、それまでの「過程」を確認すること。**

（４）ステップ

○ ボールを持ったプレーヤーの**「１歩」の定義**、また「３歩まで進むことが許される」というルールは、**過去から「不変」であり、ハンドボールが競技として成り立っていくための特徴**である。

○ 当然ながら、**ボールをキャッチした瞬間を確認**しない限り、正しいステップの判定はできない。

○ モダンハンドボールの考え方から**「スピーディーな魅力ある試合展開」が最優先され、観察がおろそかになってはいないか。**

○ ４歩以上進んだ時点で競技を中断させなければならない。

○ **アドバンテージを適用している状況下**でも、ボールを保持している攻撃側プレーヤーに許されるのは**「３歩」まで**である。４歩以上進ませた結果、攻撃側が得点につなげたる（シュートやアシストパス）、あるいは防御側の違反で防御側プレーヤーに罰則を適用することがあってはならない。

以上よろしくお願い申し上げます。

何かご不明な点等ございましたら、以下連絡先まで遠慮なく申しつけください。福井で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

2024年12月7日

（公財）日本ハンドボール協会
審判本部長（大会審判長）
福　島　亮　一
futkun1212jp@yahoo.co.jp

第76回 日本ハンドボール選手権大会 女子の部